
無重力くん

雛祭パペ彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無重力くん

【Nコード】

N0158B

【作者名】

雛祭パペ彦

【あらすじ】

無重力トビオは、ペットの秋田犬なしでは移動することも出来ない。無重力状態の学園ギャグ。

「こちら、今日から皆といっしょに勉強することになった『無重力トビオ』くんだ。仲良くするように」

担任がそう紹介すると、無重力トビオは、うやうやしく一礼をしてみせた。

「はじめまして。無重力といいます」
「ワン！」

無重力トビオのそばにいる秋田犬が、主人の挨拶に合わせて吠えた。

その秋田犬の首輪から伸びているヒモは、教室の天井近くで浮かんでいる『無重力トビオ』が握っていた。

つまり、無重力トビオと秋田犬は主従関係にあり、平たく言えば、飼い主と飼い犬の関係だった。

「ご覧のように、僕は、無重力状態にあります。べつに好きで浮かんでいるわけではなく、僕の意味とは関係なく、1年365日、お正月もクリスマスも関係なく、僕は無重力状態なのです」

「ワン！」

秋田犬があまりにもタイミング良く吠えるので、クラスメイト達から笑い声が起こった。

「無重力という苗字の人間が、無重力状態であるなんて冗談みたいな話ですが、見てわかるとおり、これはノンフィクションの学園SFラブコメディです」

「ワン！」

一部の女子生徒から「カワイー」という声が湧き起こり、そんな秋田犬に向けて忌々しい視線を送りつつ、無重力トビオは話を続ける。

「僕は、常に無重力状態であるがゆえに、この秋田犬なしでは生活することができません。そこで、皆さんにお願いしたいのは、この

秋田犬に、絶対にエサを与えないでほしいという事です」

「なんでー？」

頭の悪そうな男子生徒の声が、無重力トビオに対して投げかけられる。

その男子生徒の態度に、わずかな腹立ちを覚えたせいで、天井近くに浮かんでいる無重力トビオの体勢は、逆立ちする格好になった。頭に血がのぼったためである。

「なぜエサを与えないでほしいのかというと、はっきり言って、この秋田犬は食い意地ばかりのバカ犬だからです。このバカ犬の野郎が、いったん食べ物の匂いを察知しようものなら、首輪ヒモの先でフワフワと浮かんでいる僕のことなどお構いなしに、急発進・急力ীব・急ブレーキの乱暴運転で、目的の食べ物に向かって、むしゃぶりついていくのです。そのうえ、食べ物を持っている相手が若い女の子だったりしようものなら、イヤらしい肉球で、ついでにオツパイを揉んだりもします。スケベ野郎のこん畜生なのです」

「ワン！」

話の流れからして、秋田犬の吠え方は、自らの怠惰な性的嗜好を認めるような印象を皆に与えたため、教室内の笑い声は、ますます大きくなった。

「あと、もう一つ。これは命に関わることなのですが、一生のお願いですから、くれぐれも、イタズラ半分で僕と秋田犬をつなぐ首輪ヒモを、ハサミなどでチョン切ったりしないで下さい。なぜなら、ご覧のように、僕は無重力状態にあります。その僕の命綱ともいえるヒモを切った場合、文字通り、宇宙に吸い寄せられるように、僕は空に向かってゆっくりと果てしなく飛んでいってしまいます。それが体育館などの屋内であれば、レスキュー隊を呼ぶ程度の騒ぎで済みますが、屋外、たとえば体育の時間、運動場などで命綱を切られた場合、自衛隊へり出勤などという、ちょっとした国家レベルの騒ぎになることが予想されるからです。あ、これは予想というか、実際、僕が小学5年生の頃に、命綱を切っちゃった奴がいました。

その時、大気圏に向かってまっしぐらだった僕を救出するために、自衛隊のヘリが20機ほど出動しました。そのイタズラをした同級生の名前は、橋本くんというのですが、あれから5年たつたいまでも、ヘリ出動費用の数千万円&僕への慰謝料532万6300円(税込)の返済をするため、高校進学をあきらめた橋本くんは、バイク工場の見習い工員として頑張っているはずです。あと、そんな橋本くんのお父さんとお母さんは、事件以前は、2人とも市役所に勤めていたのですが、なぜなのか揃って退職をされたらしく、現在は、どこかの工場で夫婦仲良く働いているとかいないとか。まあ、とにかく、故意にヒモを切らないよう気を付けてさえ頂ければ、僕としては助かります」

「ワン！」

おなじみの秋田犬がタイミング良く吠えて見せたが、イヤな話を聞かされたせいなのか、担任を含め、笑い声をあげるクラスメイトは1人もいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0158b/>

無重力くん

2011年10月1日23時52分発行